

長崎県対馬市で実施した環境教育プログラムへの 参加者による関心や印象の変遷

A Study about the Transition of Concerns and Impressions by the Participants in Environmental Education Program at Tsushima

高橋 正弘

TAKAHASHI Masahiro

大正大学

[要約]本研究は、長崎県対馬市に生息する絶滅危惧種のツシマヤマネコの保護をめぐり、実際に現地でその活動に学生たちが参加するというプログラムを環境教育として提供した場合、参加者が事前から事後に至るプロセスの中で印象や認識をどう変遷させるかという点に注目し、アクティブ・ラーニングとして実施される環境教育プログラムの経験と教訓を析出する試みである。2019年に実施したプログラムへの参加者に対して行ったアンケート調査（事前・事後・14か月後の3時点）の結果、事前では主に期待や個人的なニーズが語られるが、事後では体験に基づく強烈な印象が語られ、そして印象に過ぎなかったものが14か月後には他者に発信したりアプローチしたりすることの必要性や再認識したこと、問題をよく理解しようと思うようになったことなどへと変遷していく傾向が見られた。

[キーワード] 環境教育, 対馬市, ツシマヤマネコ, ボランティア, アンケート

1 はじめに

中央教育審議会が2012年に行った「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の用語集には、アクティブ・ラーニングについて「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」という記述が見られる。これは、大学教育が今後採用すべき学習スタイルの例示をしたものとして、特に注目されている部分である。

大学で環境教育として取り組まれるプログラムは、ここで指摘されているアクティブ・

ラーニングと親和性が高いと考えられるが、プログラムの具体的な取り組み手法にはさまざまな試行錯誤が行われている（高橋 2017）であろうし、その試行錯誤の経験は、アクティブ/ラーニングとしての環境教育の底上げを図っていくためにも今後共有がめざされていく必要がある。

そのような環境教育として取り組まれるプログラムが、環境教育として、また主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングとして、どのように機能したかについて注目することは重要である。その際、プログラムに参加した学生が、実際にプログラム展開の中でどのような学習を重視し、体験をどのように受容したか、そしてその体験に基づく印象がどのように定着しているかについて精査し言語化する作業を行うことが必要となる。

それには、当該プログラムがどのようなものであるかについて概要を示し、それへの参加者に対して実施したアンケート調査を分析し、プログラムについて参加者がどのような

印象を把握したか、そしてそれが参加の前後でどのように変遷していったかについて、明らかにする作業を行うことがアクティブ・ラーニングとしての環境教育を検討する上で重要と考えられる。

2 研究目的および方法

上述の課題意識を踏まえて、本稿では大学で取り組まれている具体的なあるひとつの環境教育プログラムに注目し、それへの参加者からのアンケートという形式で行ったフィードバックを精査することとする。取り上げるのは、ツシマヤマネコの保護をめぐって長崎県対馬市をフィールドとして実施している4泊5日の宿泊型の環境教育プログラムである。

大正大学人間環境学科では、2017年から長崎県対馬市をフィールドとして、有志の学生によるツシマヤマネコの保護に係るボランティア活動に取り組んできている。野生生物保護論や環境教育論といった教室での座学を受講した学生の中で、実際に野生生物保護の最前線で体験を中心にして学びたい意欲のある学生が参加するもので、単位は付与されない正課外の活動として企画し実施しているプログラムである(本田・高橋 2018, 本田 2018)。

このプログラムは、開催を6月頃に告知し募集を開始し、参加者が確定したら5日間程度の自主ゼミとして、各自が対馬市およびそこでの自然や環境などを調べ学習する事前学習を行ってから、9月に実際に対馬に訪問してプログラムを体験する。終了してからおおむね2ヶ月後に報告会として、学園祭で発表するパネルを作成して展示し解説を行う、といった一連の流れで展開している。

募集については、まず学科内の野生生物保護に関するゼミで告知し、応募の定員枠を見ながら、環境教育のゼミでも募集し、毎年5ないし6名の学生を決定する。プログラムの運営に際しては、対馬市側の協力が必須となるが、対馬市役所および佐護の対馬野生生物

保護センターと厳原の対馬自然保護官事務所の訪問と、レクチャーや施設見学を依頼した。特に対馬野生生物保護センターには、特別に宿泊施設を準備してもらい、またセンターを拠点としたツシマヤマネコの保護に関する具体的なプログラムの設定を依頼し、多大な協力を得ることができた。

本研究の方法は、質的調査を中心とする。具体的には、プログラムの参加者に実施したアンケートを取り上げる。アンケートは、プログラムの事前と事後、および1年程度経過した時点の3回を必ず実施してきた。

本研究では、2017年から実施しているプログラムの第3回目として2019年9月2～6日に実施したプログラムを取り上げる。このプログラムには5名が参加した。いずれも大正大学人間環境学科3年生で、男子学生3名、女子学生2名の計5名であった。ただし当該プログラムには、前年度のプログラムに参加した上級学年の2名が卒業研究の一環で対馬市に滞在していたため、プログラムの一部と一緒に参加した時間帯もある。ただしアンケートは3年生の参加者5名に行ったもののみを分析する。なお筆者らは、プログラムの実施者として引率・運営していたため、参加者たちの最も近くで参与観察を行った。

3 結果

3-1 アンケート調査の概要

アンケートは、1回目が事前としてプログラムの1ヶ月程度前の2019年7月に、2回目が事後としてプログラム終了後1ヶ月程度の2019年10月に行った。またプログラムの14ヶ月後となる2021年1月に3回目のアンケートを行った。アンケートの設問項目は、環境問題への関心、ツシマヤマネコについての知識・認識、ツシマヤマネコ保護に向けてやれること、対馬での活動についての興味・評価、ツシマヤマネコ保護の課題、ESD能力の状況である。質問項目は全部で28問であり、

それらの多くは選択肢式とした。ただし最後の2問は記述式とした。全体的に5～10分程度で回答が終わるように設定した。

本研究では、当該アンケートの中で記述の形式で回答してもらった設問を取り上げる。それらをテキストで表に整理し、内容の比較を通じて、参加者の期待や印象の変遷を読み取る作業を行う。

3-2 活動内容へのニーズ・活動に参加して感じたことについての回答

質問項目の中の間27(事後では間28)の設問は、事前では「対馬でのボランティア活動の中で、自分が特にやりたい作業や内容について自由に書いてください。」に、事後では「対馬でのボランティア活動について感じたこと(よかった点・悪かった点含め)を自由に書いてください。」とした。この間27に記述されたテキストを整理すると、表1のとおりとなった。

3-3 自身の期待と変容についての回答

質問項目の中の間28(事後では間27)の設問は、事前では「対馬でのボランティア活動で期待していることについて自由に書いてください。」とし、事後では「対馬でのボランティア活動の中で、あなた自身どのように変わりましたか?自由に書いてください。」としたものである。この間28に記述されたテキストを整理すると、表2の通りとなった。

3-4 小括

事前の活動へのニーズ表明では、参加動機として、概ね企画の意図を理解していることが読み取れる。具体的な活動項目を挙げているものと、活動の理念について言及するものが混在している。このプログラムは遊びではない、という真面目な受け取り方は記述に反映されている。特に野生生物保護の活動に参加したい、という意欲が見られる。

事後で、実際に印象が強かったことについては、体力的にきつかったカルバートの清掃作業への言及が散見される。また「見ることができた」、「わかった」、「勉強になった」という感想が提出されたことから、このボランティア活動として参加したプログラムが、学習経験でもあったことは参加者に理解されていることが伺える。

14ヶ月後では、直後の感想からさらに考え方が深まっている様子が読み取れる。「自分にできることがあるとすれば、という視点を持ちやすくなった」とか「提案とその提案の実現や維持することは別の難しさがあることが分かりました」などは、参加の直後にはみられなかったような、醸成された考えであることが読み取れる。

事前で把握した活動への期待では、単純に保護活動に参加することの想いや期待が述べられている。その中には活動に参加することへの「楽しみ」や現地での「ごはん」などといった要素も語られる。しかし事後に尋ねた変容については、新たな気づきや自分自身が考えることの契機となったということなどが述べられ、事前に把持された単純な期待が、実際の体験を通じて動揺し、新たな認知や改めて思考することへの導入となったことが読み取れる。また14か月後においては、事後の強烈な印象に基づく変容から一步すすんで、発信の必要性や再認識したこと、問題をよく理解しようと思うようになったことなどが述べられ、プログラムへの参加直後からさらに意識が変容していることがわかる。

4 考察

事前の段階では、各自のイメージで活動への期待が把持されているが、事後では直接体験したことから得られた印象が強くなる傾向が見られた。つまり事前から事後に至るプロセスで、実際の経験が参加者の心象を大きく変化させていることになる。具体的な野生生物

表 1 活動内容への期待・活動に参加して感じたことについての回答

	事前：活動の中で、自分が特にやりたい作業や内容について	事後：活動について感じたこと（よかった点・悪かった点含め）	14か月後：活動について感じたこと（よかった点・悪かった点含め）
学生 A	ツシマヤマネコが事故にあいにくくするため、道路沿いのそうじ・整備	希少生物の保護活動に参加できて、 <u>肉体的にも大変なことが多かった。</u> 人手不足の問題を感じた。	絶滅危惧種のための活動というものは身近に感じ考えることができなかったが、体験することで少し身近なものに感じるようになった。また一学生である自分でも微力ではあるが活動を手伝うことができ、ツシマヤマネコだけでなく他の環境問題を見た時、 <u>自分にできることがあるとすれば、というような視点を持ちやすくなったと感じる。</u> 生物の保全保護をする上で、ツシマヤマネコでいう交通事故問題のように、人との関係性をより強く感じるきっかけにもなった。
学生 B	交通事故の防止に関する取り組み／活動。口でいうことは簡単に感じるが実際にどのようなようになって、どのような風に防止していくのかがいいのかなどを学びながらボランティア活動できたらと思います。	対馬の環境や活動を <u>実際に見てふ</u> れることができたのは、今後の活動においてプラスになった。特に絶滅危惧種に対する取り組みはなかなかみることができないので <u>勉強になりました。</u>	知識が実際に体験することで、クリアなモノになった。絶滅危惧種の為にどのようなことをすればいいか、貴重な経験をさせてもらった。まだまだツシマヤマネコと共生するのは難しそうだと <u>ことも感じた。</u>
学生 C	ツシマヤマネコが生きていく手助けを人間が行っていると思うので、それのお手伝いや、具体的にヤマネコにどんなアプローチをしているのかが知りたいです。	カルバート清掃は <u>心身共に大変であ</u> った。雨が降るたびに木が流れてきてしまう点をなんとか改善できればセンターの負担も減りその分他の事に取り組めると思った。	カルバート清掃のお手伝いをおこなった時に、環境整備の難しさを体感しました。泥や木がおしよせてカルバートがうもれてしまっているのを手作業で掘りすすめながら <u>提案とその提案の実現や維持することは別の難しさがあることが分かりました。</u>
学生 D	ツシマヤマネコのくわしい情報と現状を知ること。それに対して対策を考えていくこと。	島の人々は思ったより好意的にツシマヤマネコのことを考えてくれていたのが分かった。次世代につなげていくためにも、子供たちにも少し体験させたり説明するべきだと思った。	実際に体験してみて、アナログ的な作業と個体確認としてカメラの導入等を混合させながら <u>多様な取り組みをしていると感じた。</u> ただ一方で、ボランティアの参加や取り組み内容を住民がどれだけ理解しているのが少し不透明だった。
学生 E	ツシマヤマネコの事故対策でどのようなことが行われているのか知ると同時に、いろいろ活動できればと思います。	対馬ではカルバート清掃が <u>印象に残</u> っている。実際に現地に行って見て清掃することでどのような現状なのかを実感することができた。施設に行って色々話を聞け、どのような取り組みがされているかも <u>見ることができ良かった。</u>	大学での座学（事前学修）を踏まえて、実際に現地へ行き、話を聞いたり、清掃作業などを体験することで実感ができた。対馬から離れた地域でもさらにこういった活動などについて <u>伝わると良い。</u>

※下線は筆者による

表2 参加者自身の期待とその変容についての回答

	事前：活動で期待していることについて	事後：活動の中で、あなた自身どのように変わりましたか？	14か月後：活動の中で、あなた自身どのように変わりましたか？
学生A	対馬の自然に直接触れられること。ツシマヤマネコを見る。ご飯。	身近に感じるができなかった希少生物の保護活動を実際に体験して、都内に住む自分でも行動を起こせば少しでも活動の力になれると分かった。 <u>自ら行動を起こす大切さに気づくことができた。</u>	一種の生物を保全保護する上で、多くの課題がつきまとい、それぞれが更に複雑化する様子を見て、環境問題という大きな課題の解決の難しさを少し感じとれたと思う。
学生B	実際に現地でしか知りえない体験、空気感を学びたい。「1つの動物の為に活動する」ということをしたことがないので、どのような取り組みが現地で行われているのか学びたい。	何かを変える為には <u>多くの人としっかりとしたい思いが必要だと再確認できました。</u> 将来は人と人の思いによって生まれる事業をしたいと思っていたので、いい経験になりました。	自分がツシマヤマネコの保護活動の中で体験・知ったことをもっと多くの人に発信したいと思った。ラジオドラマの脚本に模したので、行政の方と修正をくわえて作品にできたらいいなと思った。
学生C	実際に貴重な生物を守っているという活動に自分が参加できることが楽しみであり、自分が対馬にいったという跡をのこせることを期待していると思います。	種を守っていく難しさを知ったことで、 <u>より現実的に野生動物保護について考えることができるようになった点。</u>	保護したい野生動物にとって本当にためになるのかと活動の中に考えることがありました。それは保護したい気持ちが先行しすぎて逆に生きづらくなる場合や事例も取り組み方によっては起きてしまうかもしれないという小さな不安でした。これは野生動物だけではなく、人にも言えることで <u>自分の気持ちを一方的に押し付けることはよくないことだと再認識できました。</u> また行動の一つ一つが周囲にどんな影響をあたえるのか考え、周りをよく見るようになったことも私自身の大きな成長であったと考えています。
学生D	実際に自分が対馬に行って活動や対策等を考え、実行したことが少しでも何かの役に立ったり、改善されれば良いと思う。	今までここまでしっかりと生き物のために集中的に活動することができ、 <u>やりがいを感じる</u> ことができた。	元々関心を持っていたかたの人に意識させる取り組みや、言葉を特に考えるようになった。また、ボランティアという立場で関わったことで、 <u>保護する側の現状をよく理解しようと思うようになった。</u>
学生E	ボランティア活動自体あまりしたことがないので、どんな感じなのか分かりませんが、自分がどう貢献できるか楽しみです。少しでも力になれば、知ることができたら良いと思っています。	今までは調べて情報を得るしかなかったが、対馬へ行って、 <u>実際に保護活動がどれほど大変なのかも知れた。</u>	元々知らない状態から事前学修で対馬（ツシマヤマネコ）の実体を知り、現地で作業やチラシ配りなどをすることでより知識・興味・理解が深まった。

※下線は筆者による

物保護の活動に参加してみて、そういった活動は地道で泥臭いことが多い、しかしそれが現場では本当に重要なのだ、ということについて確実に理解することができるようになっていく。活動参加から14ヶ月を経て、さらにその印象は充実したものになっていく。そして他者に対しての新たな関係性の必要性、例えば伝えることの必要性など、自分だけの経験だったことから、それを外部に拡張していくこと必要であるという認識を抱くようになっていく様子が読み取れる(図1)。

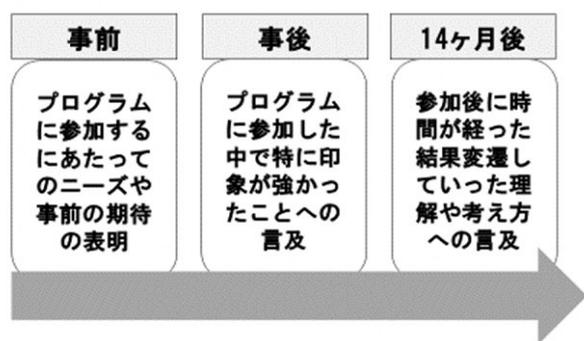


図1 事前・事後・14か月後の言及の変遷

5 おわりに

環境教育プログラムの全体像を実施後に整理する際には、たとえ簡易なアンケートであったとしても、参加者のニーズはどこにあったか、またプログラムがどう受容されたかを把握するために、少なくとも事前と事後で参加者の考えや印象などを書いて記録することは必須である。そこでの体験がその後どのように変化し、参加者の内面でどの方面に醸成していったかを理解するならば、一定程度経過後に改めて参加者に回答をしてもらう調査を実施することは重要である。特にアクティブ・ラーニングのような、近年になって重要性が指摘され実践が行われるようになった教育手法によって、実施後の長期にわたる効果の持続やプログラム自体の意義についての知見が多くない今日では、データを収集する作業を意識的に計画しておくことが必要である。

正解のない課題に向き合い、最適解と思わ

れるものを他者と協力して考え導き出す力を醸成するのがアクティブ・ラーニングであるとするならば、そのような学びを生涯にわたって自発的に繰り返していける能動性を養うためにも適切なアクティブ・ラーニングが企画され実践されなければならない。野生生物保護という課題を、生涯にわたって忘れずにとときには取り組めるような意識づけをこのようなプログラムを通じて拡大していくことは引き続き課題として残されているものである。

謝辞

プログラムの実施に際しては、対馬市内の環境省および対馬市役所の関係者や担当者に変えて多大な協力をいただきました。プログラムに参加しアンケートに回答いただいた学生の皆さんにも感謝します。

付記

本研究は、令和2年度 大正大学学術研究助成「再導入事業における乗数的効果を企図した環境教育のガイドライン構築」の一部として実施しました。なお2020年度は新型コロナウイルスの流行により、当該活動を行うことができませんでした。また対馬でこの活動が再開できるようになることを願っております。

文献

- 本田裕子 (2018) ツシマヤマネコの交通事故対策をめぐるボランティア活動と環境教育的意義について, 環境情報科学学術研究論文集, 32, 329-334
- 本田裕子・高橋正弘 (2018) ツシマヤマネコの交通事故対策に関する意識啓発活動の実践について, Wildlife forum, 22(2), 32-36.
- 高橋正弘 (2017) 「主体的・対話的で深い学び」を実現する環境教育, 環境教育, 27(1), 12-15.